鋼鉄都市

アイザック・アシモフ／福島正実訳

THE CAVES OF STEEL

訳者略歴　昭和4年生，昭和51年没，作家・評論家・翻訳家　主著書「未踏の時代」「月に生きる」主訳書「人形つかい」ハインライン（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy

鋼鉄都市

〈SF336〉

昭和五十四年三月二十日　印刷
昭和五十四年三月三十一日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　アイザック・アシモフ
訳者　福島正実
発行者　早川清
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号　東京・六―四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社　製本・株式会社川島製本所

ハヤカワ文庫SF
〈SF336〉

鋼鉄都市

アイザック・アシモフ
福島正実訳

早川書房
916

日本語版翻訳権独占
早川書房
© 1979 Hayakawa Publishing, Inc.

THE CAVES OF STEEL

by

Isaac Asimov

Copyright © 1953 by
Isaac Asimov

Translated by
Masami Fukushima
Published 1979 in Japan by
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.
This book is published in Japan by arrangement
with DOUBLEDAY AND COMPANY, INC., through
TUTTLE-MORI AGENCY INC., TOKYO.

わが妻
ガートルード、
そしてわが子
デイヴィットに

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

1 警視総監との会話……九
2 高速自動走路（エキスプレス・ウェイ）……二七
3 靴屋での突発事件……四六
4 家族への紹介……六〇
5 事件の分析……八一
6 寝室の囁き……一〇〇
7 宇宙市探訪……一二三
8 ロボットについての討論……一三一
9 宇宙人による解明……一五〇
10 私服刑事の午後……一七一
11 高速走路の逃走……一九二
12 ロボット技術官の意見……二一二
13 機械への移行……二三四
14 名前の力……二五五
15 陰謀者の逮捕……二七四

16　動機に関する質問……二九〇
17　計画の結末……三〇九
18　捜査の終り……三二四
解説／福島正実……三四五

鋼鉄都市

1　警視総監との会話

ライジ・ベイリは、デスクのそばまで来てはじめて、R（アール）・サミイが用ありげに彼を見まもっていたのに気づいた。

面長なライジの、顔の厳しい線がこわばった。「なんの用だ？」

「総監（ボス）がおよびです、ライジ。急用です。出て来しだい来てくれといわれました」

「わかった」

R・サミイは無表情で立っている。

「わかったといったろう。行かんか！」

ベイリがいった。R・サミイはくるりと廻れ右して任務にもどっていった。ベイリはいらいらと考えた。なぜこうした仕事をあたりまえの人間にやらしてはいけないのだ？

彼はふと立ちどまってタバコ入れの中身を調べ、胸算用した。一日二服にすれば、つぎの配給日まで保つだろう。

彼は平刑事の区画との境の柵を出て（そこから昇進したのは二年前だった）オフィスを横切って行った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

電子記録ファイルの上にかがみこんでいたシムプスンが、彼がとおりかかったとき、顔をあげた。「総監が探していたよ、ライジ」
「知っている。いまR・サミイにそういわれた」
びっしりと記号の打たれたテープが、電子ファイルの内臓から吐き出されていた。その小さな器械は、内部に光る水銀の表面に刻まれた、微小な震動図の中に蓄えられた知識の中から、与えられた情報の〝記憶〟を分析して捜査しているのだ。
「脚一本折る覚悟なら、R・サミイの尻を思いきり蹴とばしてやるんだが」とシムプスンがいった。「このあいだ、ヴィンス・バーレットに会ったんだ」
「ほう？」
「ヴィンスはもとの仕事に戻りたがっていた。いや、ここの仕事ならなんだってよかったんだ。可哀そうに、奴は自棄になっていたよ。おれには、なんとも慰めてやりようがなかった。R・サミイが奴の仕事を取っちまったんだからな。いま、イースト農場の運搬路線で働いている。それしか仕事がないんだよ。頭脳もいいし、誰からも好かれていたのになあ」
ベイリは肩をすくめた。口から出た答えの調子が、自分で思ったより、ぎごちなく、こわばっていた。「おれたちだっておなじじゃないか。みな同じおもいをしてるんだ」
総監は個室を持っていた。ドアの曇りガラスに『ジュリアス・エンダービイ』の文字が浮き出している。ガラス繊維を腐蝕させた、精巧な、みごとな文字だった。名前の下に、『ニューヨーク・シティ警視総監』と書いてあった。
ベイリは部屋に足を踏み入れた。
「呼びましたか、総監？」

エンダービイは顔をあげた。彼は眼鏡をかけていた。傷つきやすい性質の眼なので、ふつうのコンタクトレンズが使えないからだ。総監に会う人間は、最初その眼鏡を見馴れるまで、顔のほかの部分が眼に入ってこない。そしてよく見ると、彼の顔は、ひどく露わな感じなのだ。ベイリは、以前から、総監のこの眼鏡を偽装用だと睨んでいた。眼鏡が見る人に与える印象のためなのだ。おそらく、総監の眼球は、それほどデリケートなわけではないのだ。

警視総監は見るからに落着きがなかった。カフスのしわをのばし、椅子の背にもたれて、「坐りたまえ、ライジ。坐りたまえ」と、そういった口調の、あまり親しげな調子が異様だった。

ベイリはぎごちなく腰かけて、そのまま待った。

エンダービイがまたいった。「ジェシイはどうかね、それと子供さんは？」

「元気です」ベイリは答えた。「お陰さまで。総監のお宅では、みなさん、お達者ですか？」空空しい響き。

「達者だ」と、エンダービイがオウム返しにいった。「大達者だよ」

出だしが間ちがっている。

ベイリは胸のなかで思った。総監の顔がどことなくおかしい。

だが、声になったのは全く別のことだった。ベイリはいった。「総監、できれば、R・サミイを私のところへ寄越さないでもらいたいですね」

「それはね、ライジ。きみもこうしたことをぼくがどう思っているか、ぼくの気持が判らないわけじゃあるまい。だが、彼はぼくのところに任命されて来たのだ。何かの用に使わねばならん」

「不愉快なんですよ。総監。彼はあなたが呼んでいるといった。そして、そのまま突っ立っているんです。意味はわかるでしょう。ぼくが行けといわなければ、いつまでもあそこに突っ立って

いたでしょう」
「ああ、それはぼくが悪かったのだ、ライジ。ぼくは呼べとだけいって、用が終ったら仕事に戻れと命ずるのを忘れていた」
ベイリは溜息をした。そうすると、鮮かな茶色の眸のまわりの皺がいっそうはっきりと見えた。
「結構です。用を聞かせて貰いましょう」
「そのことだ、ライジ」総監はいった。「それが、生易しいことではないのだ」
彼は立ちあがり、くるりと後向きになると、デスクの背後の壁にむかって歩きだした。見ただけではわからなかったスイッチに、彼が手を触れると、壁の一部がいきなり透明になった。
ベイリは、思いがけない灰色の光の洪水に目が眩んだ。
警視総監は微笑した。
「去年、特別に設備させたのだ、ライジ。きみにはまだ見せてなかったな。ここへ来て覗いてごらん。昔は、部屋には必ずこうしたものがあったのだ。当時は、〝窓〟と呼んでいたのだが、知っているかね？」
ベイリはよく知っていた。読み漁った歴史小説のなかに、よく出てきたからだった。
「聞いてはいました」
「来てみたまえ」
ベイリは瞬間もじもじしたが、いわれたとおりにした。閉ざされた部屋の秘密を外界に露出することが、なんとなく不体裁な感じだった。警視総監の懐古趣味もいいが、時おり極端に走りすぎる。
彼の眼鏡もおなじことだ、とベイリは思った。

あ、そうか！　そうだったのか。どうもおかしいと思ったら、それでどことなく変な感じがしていたのだ！

「失礼ですが、総監は眼鏡を取りかえたのではありませんか？」

ベイリがいうと、警視総監は軽い驚きを示して彼を見つめ、眼鏡をはずして、やや暫くそれを見まもってから、またベイリに目を返した。眼鏡がないと、総監の丸顔はいっそう丸く、顎がわずかにとがって見えた。表情はいつもよりもっと茫漠としているが、それは、焦点を合わしそこねた両眼のせいかもしれなかった。

「そうだよ」

彼は眼鏡を鼻梁の上にもどした。そして、いきなり激しい怒気が声にこもった。「古いのは三日前に壊したのだ。あれやこれや事情が重なって、今朝まで眼鏡なしで過ごさなければならなかった。ライジ、この三日間は地獄の苦しみだったよ」

「眼鏡のために？」

「眼鏡と、もう一つのことのためにだ。それは、いま話す」

彼が窓のほうを向いたので、ベイリもそれに倣った。そして、軽いショックを受けた。窓の外に雨が降っていたのだった。一瞬彼はその、空から水の落下する壮大な光景に見惚れていた。総監はその自然現象が自分の働きででもあるかのような、誇らしげな様子を身体中にみなぎらせて立っていた。

「今月にはいってから、雨の降るのを見るのはこれで三度目だ。すばらしい眺めだとは思わないか、ライジ」

意に反して、ベイリはその光景の壮大さに搏たれる自分を感じないではいられなかった。四十

二年の生涯を通じて、彼は雨の降るのを、数えるほどしか見たことはなかった。雨に限らない。自然現象はなんによらず殆んど知らないのだ。

「あれだけの量の水が、ただシティの上に降るのは無駄な気がしますね。貯水池に溜めておくべきです」

「ライジ、きみは現代派だ。それがきみの欠点なのだ。中世期には、人々はすべて戸外で生活した。ぼくのいうのは、農場のことだけではないよ――都会も戸外に在ったのだ。このニューヨークでさえもだ。雨が降れば、当時の人々は無駄だなどとは考えなかったんだ。雨を誇りとしたものだ。彼らは自然に則して生活していたのだよ。そのほうがずっと健康だし、さまざまな意味で良い。現代生活の欠陥は自然と絶縁してしまったことに原因があるのだ。きみも、たまには、『石炭時代』(コール・センチュリ)でも読んでみるといい」

ベイリは読んでいた。それだけでなく、あちこちで、原子炉の発明に対する不平を聞いていた。ベイリ自身も、なにかうまく行かないときや、疲れたときなど、ほんとうに原子炉など出来なかったらよかったのにと思ったことがある。こうした不平は、人間性に天性そなわった一つの習性なのだ。石炭時代の人々は、蒸気機関の発明に不平を鳴らしている。シェイクスピアの芝居の一つに出てくる配役は、火薬の発明を嘆いている。おそらく、千年後の時代の人々は、電子頭脳の発明を非難するだろう。

糞くらえだ。

ベイリは陰気に、「ねえ、ジュリアス」といった。(勤務時間中は、たとえ総監のほうからどれほどライジ、ライジと親しげに呼ばれても、こっちから親密さを示すことは避けていたのだ。だが、ここで、すこし相手の注意を喚起する必要があった)「ねえ、ジュリアス、あなたはさっ

きから用事以外のことばかり喋っている。気になってしかたがないが、いったい、なんなのです？」

警視総監は答えた。「いま話すところだ、ライジ。ぼくの流儀で話させてくれ。面倒な――じつに面倒なことなのだ」

「そうでしょうとも。このくさった惑星に面倒以外のなにがあります？　またR（アール）関係のトラブルですか？」

「ある意味ではそういえる。ライジ、ぼくはここにこうして立って、この世界が、これ以上どれだけの面倒事を起せるのかと考えた。この窓を作らせたとき、ぼくは空など時たましか見る気はなかった。シティを見るためだったのだ。シティを見ては、来世紀には、ここがどうなってゆくのだろうと考えるのだ」

ベイリは総監の感傷に反撥を感じながらも、いつか、窓外をうっとりと眺めやっている自分自身に気づいた。雨天にけぶっていてさえも、シティの威容は言語に絶した。警察本部は市役所（シティ・ホール）の上層部にあり、市役所は宙天高く聳えていた。総監室の窓から見ると、ちかくの摩天楼はずっとひくく、屋上がはっきり見える。それは、地上から空めがけて生えた無数の指さながらだった。ビルの壁はのっぺらぼうで窓ひとつない。人間という生物のすむ巣箱の、これは外殻なのだ。

「ある意味では」と総監がまたいった。「雨の降っているのが残念だ。宇宙（スペース・タウン）市が見られない」

ベイリは西に視線をやったが、総監のいった通りだった。

地平線は閉じていた。ニューヨークの摩天楼は霞のなかにしだいにかすんで、まっ白な空を背景に尽きていた。

「宇宙（スペース・タウン）市なら、知っていますよ」ベイリはいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com